

恵那市の新発見城館跡

明知城周辺調査事業・恵那市城館跡分布調査報告書 1

2022年3月
恵那市教育委員会

例 言

1. 本書は、恵那市教育委員会が令和3年度に明知城周辺調査事業の一環として実施した、恵那市城館跡分布調査の報告書である。
2. 調査は、現地調査を令和4年1月7日～11日の4日間実施した。各城館跡の縄張図の作図及び浄書並びに所見作成は、有識者が分担して行い、全体を齋藤慎一が統括し、中井均が監修した。
3. 調査は、有識者による指導及び支援を受けて、以下の体制により行った。
 - (1)有識者 中井 均 齋藤慎一 若林 健 鈴木晃太郎
 - (2)事務局 恵那市教育委員会生涯学習課歴史資産整備係 担当：三宅唯美、塚本恵伍
4. 本書は、有識者が市教委に行った報告（『恵那市城館跡分布調査報告書』2022年2月28日受理）に基づいて編集したものである。執筆者は目次及び文末に記した。各城跡の縄張図はそれぞれの執筆者が作図した。
5. 本書の編集は三宅唯美が行った。

目 次

1. 調査に至る経過	（三宅唯美）	1
2. 調査の概要と城館跡の位置	（三宅唯美）	1
3. 城館跡の概要		
飯高城跡	（鈴木晃太郎）	2
田沢城跡	（若林 健）	4
奈免入城跡	（齋藤慎一）	6
釜屋大洞城跡	（齋藤慎一）	8
陣屋敷	（齋藤慎一）	10
上矢作大平城跡	（若林 健）	12
裏山城跡	（齋藤慎一）	14
4. 総括	（中井 均）	16

〈参考文献〉

- 恵那市教育委員会 2019『恵那市遺跡詳細分布調査報告書』
- 岐阜県教育委員会 2004『岐阜県中世城館跡総合調査報告書第3集』
- 高田 徹 1999「恵那市の中世城館について」『大井城跡—市立大井小学校校舎建設に伴う緊急発掘調査報告書』恵那市教委
- 2020「岐阜県恵那市山岡町釜屋所在の新規発見城郭について—統合型地図情報システム「ひなたGIS」の活用から」『中世城郭研究』34
- 三宅唯美 1999「恵那市内の城館関連遺跡について」『大井城跡—市立大井小学校校舎建設に伴う緊急発掘調査報告書』恵那市教委
- 森本勝巳 2021「恵那市山岡町での未確認城郭の3城 飯高城（仮称）・田沢城（仮称）・奈入城（仮称）の発見について」「恵那市岩村町での未確認城郭 小沢山城（仮称）の発見について」「恵那市上矢作町での未確認城郭の2城 達原城（仮称）・下城（仮称）の発見について」

1. 調査に至る経過

恵那市域の中近世城館跡については、平成10年度に旧恵那市が城館跡の可能性のある遺跡の確認を行った（高田1999、三宅1999）。平成16年度には岐阜県教委が岐阜県中世城館跡総合調査の結果を公表しており（県教委2004）、市内では59カ所（伝承のみで遺構の確認できない遺跡を含む）が中近世城館跡とされている。また、平成30年度に公表した遺跡詳細分布調査（市教委2019）で種別が「城館跡」とされた遺跡は82箇所となっているが、これは新規発見があったわけではなく、県教委2004で参考地とした遺跡も「城館跡」と分類した結果である。

以上のように、平成16年度以降、市教委は新規発見の城跡を認識していない。ところが近年、岐阜県が「岐阜県CS立体図2019」を公開し、これに基づく立体地図が手軽に閲覧できるようになった（宮崎県「ひなたGIS」<https://hgis.pref.miyazaki.lg.jp/hinata/>）。高田徹はこれを活用した城館調査の可能性を報告し、事例として恵那市域で新規発見の城跡1箇所を報告した（高田2020）。森本勝巳はこれを受けて岐阜県下で城跡の可能性のある地形の踏査を精力的に行っている。その成果はTwitter（<https://twitter.com/40cmKatsumi>）で逐次公表しているほか関係市町村にも情報提供を行っており、市教委には新規の城跡6カ所の発見を報告している（森本2021）。

高田、森本が発見した城跡については、早急に現地確認をしてその範囲を把握し、周知の遺跡としてその保護を図っていく必要がある。また、立体地図の活用は始まったばかりであり、城跡その他の遺跡の可能性のある箇所はさらに増えることが見込まれるため、市教委も独自に市内全域の中近世城館跡を見直し、立体地図精査とこれに基づく現地確認を行う必要があると判断した。

今回の調査は、その嚆矢として、新発見の城跡7カ所の分布調査を行うものである。なお、7カ所は、その立地からは、元亀天正の争乱（1572～75）の過程で築城された陣城の可能性が高いことから、市が計画している「明知城跡総合調査」の前提としてのデータ収集の一環としても重要であると考え。以上から、明知城跡周辺調査事業として城館跡分布調査を実施するものである。

（三宅唯美）

2. 調査の概要と城館跡の位置

調査は縄張図の作成を中心として行った。その体制、日程等は例言に記したとおりである。調査対象は高田、森本が報告した6城及び県教委2004で城館跡類似遺構とした陣屋敷の計7カ所である。森本報告の「小沢山城（仮称）」については、事務局による事前踏査により城跡ではないと判断されたので対象から除外した。また、遺跡名は、恵那市における新発見遺跡の名称付与の慣習により付したものであり、高田2020、森本2021との対応は次のとおりである。

高田2020：釜屋大洞城跡（変更なし）

森本2021：飯高城跡（変更なし）、田沢城跡（変更なし）、奈免入城跡（奈入城）、上矢作大平城跡（達原城）、裏山城跡（下城）

調査対象の所在地は山岡町4カ所、明智町1カ所、上矢作町2カ所であり、位置は巻末の地図のとおりである。

（三宅唯美）

3. 城館跡の概要

いいだか

飯高城跡

所在地：岐阜県恵那市山岡町馬場山田

小 字：飯高

立 地：天瀑山から西に伸びる尾根の先端頂部に占地する。萬勝寺（飯高観音）を西に見下ろす。東には岩村と明知を結ぶ街道が通り、城跡のある尾根を越える個所は鞍掛峠と呼ばれる。萬勝寺は、平安時代に創建され天正2年（1574）ごろに戦火により焼亡した飯高山満昌寺の跡地に、元和2年（1616）に創建された。

標 高：631m

比 高：55m

現 状：山林・神社

遺 構：堀切・豎堀・郭・土塁

残 存：ほぼ完存。斜面の一部は地すべりによる崩落あり

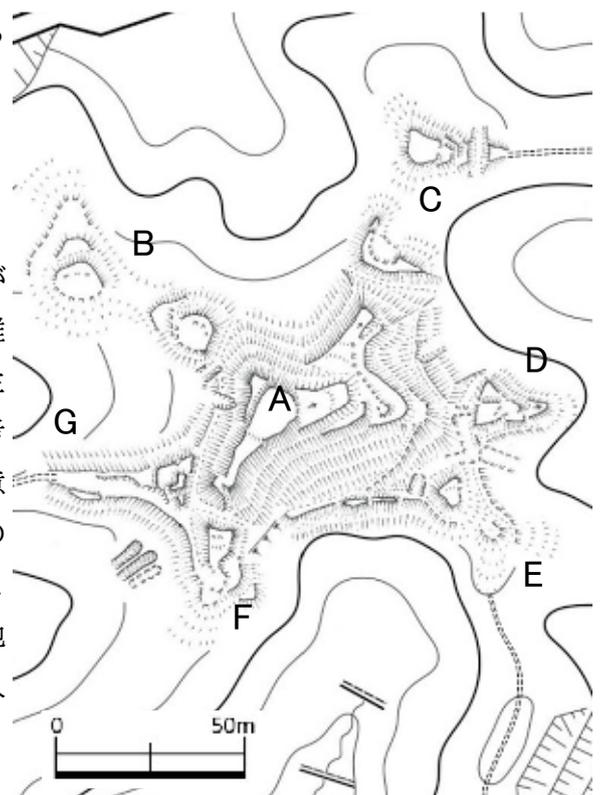
調査日：2022年1月9日

遺構の観察所見

- ・城域東西約150m、南北約180mの規模。
- ・全体的に傾斜続きの地形であり、明瞭な郭と言えるのがA地点のみだが、現状として神社が建っているため後世の造成の可能性あり。
- ・A地点を主郭にB～G方向に伸びる尾根全てに堀切が設けられている。
- ・C尾根の堀切を超えた先に三方土塁状の高まりに囲まれた空間あり。
- ・E尾根からF尾根堀底を抜けG方向に抜ける導線が確認できるが、G尾根は神社の参道整備のため遺構改変を受けている。
- ・E-F間の中央に土塁が造成され、その背後に主郭へつながるルートが確認できたが、林道である可能性も否めない。
- ・F-G間に3条連続した豎堀が確認できる。

考察

西麓に平安時代から続くとされる古刹萬勝寺（飯高観音）が在るため、古来より人流の絶えない地であったことは想像に難くない。明瞭な郭造成がほぼ主郭に限られているのに加え、主郭面積も広いものではないため恒常的な施設としての利用は考えにくい。各方向に伸びる尾根全てに堀切を設け遮断線を意識していることが窺えることから、平時には尾根上のルートの人々の往来を監視し、戦時にはルートを閉鎖することを目的としていたことが推測される。また、東に広がる張り出し状の地形Dの堀切中央に障壁状の高まりがあることからこれ以後の侵入を制限しようとする意図も推測できる。（鈴木 晃太郎）





主郭南東斜面の切岸



B尾根の堀切



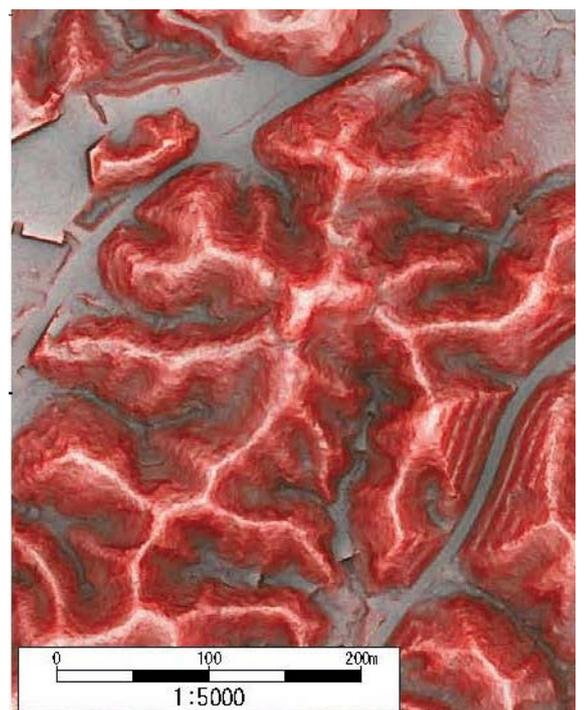
D・E間の豎堀



E尾根の堀切



遺跡の位置 1:10,000



赤色立体地図

田沢城跡

所在地：岐阜県恵那市山岡町田沢

小 字：大音寺・奈免入・鎌田

立 地：峰山から北西に伸びる尾根のうち、田沢と峰山集落（山岡町馬場山田）を結ぶ奈免入林道が通過する谷の北側尾根上に所在する。尾根上には、奈免入林道と並行するように、田沢と峰山を結ぶ里道が通る。

標 高：611m

比 高：80m

現 状：山林

遺 構：郭・土塁・堀切・豎堀・土橋

残 存：完存

調査日：2022年1月8日

遺構の観察所見

- ・標高611mのA地点を主郭とする。主郭の東には土塁あるいは櫓台状の遺構が観察できる。
- ・主郭の北から東方面には一段低い部分があり、Bの堀切から主郭への道となる。
- ・城内はEから主郭、さらに途中崩落地形を挟むものの各郭の南面を通り、Dに至る道が通過する。道は麓から尾根筋を通過して峰山方面へ至ると思われる。
- ・主郭東側には二つの郭を設けB・Cの堀切を配している。Cの堀切については隣に豎堀を設けており、二重堀切の可能性も残る。
- ・さらに東側には自然地形の鞍部の先に堀切Dを設けている。堀切の造成は城内側は甘く、城外側は急であり通行の障害を意図するものとうかがえる。
- ・主郭南西尾根には自然地形の区画を挟んで堀切Eを設ける。中央に土橋を設け、南北に豎堀を落とす。こちらの堀切も堀切D同様に内外にて造成の差が見られる。
- ・主郭南尾根にも小郭の先に豎堀状の地形Fがあるが、他の遺構の規模との比較から考えても谷筋の崩落と推察される。

考察

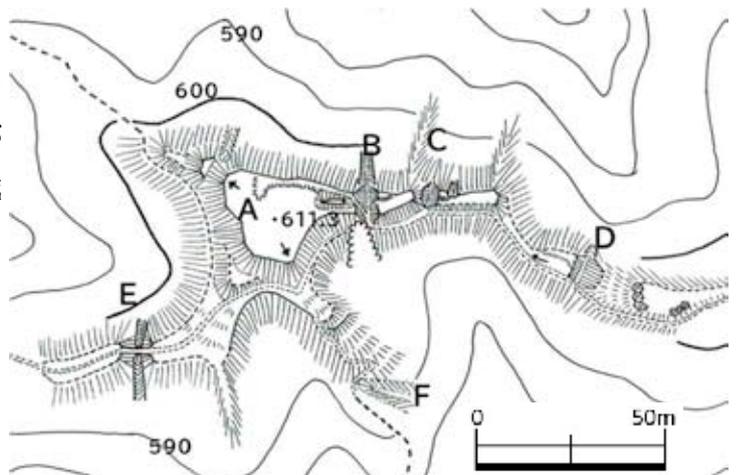
いくつか小郭を持つものの、基本的には単郭の城館である。

城内を尾根を通る道が貫通することからこの道を監視、時には封鎖する意図が伺える。

現在は南の沢沿いに奈免入林道が通っているものの、中世段階ではこの道は無く、尾根筋を通る道が地域をつなぐ経路であったことを考えると、この城の目的もより明瞭になるだろう。

また、この城の南には奈免入城があり、セットとしての機能も推察される。

(若林健)





主郭虎口と櫓台状の土盛り



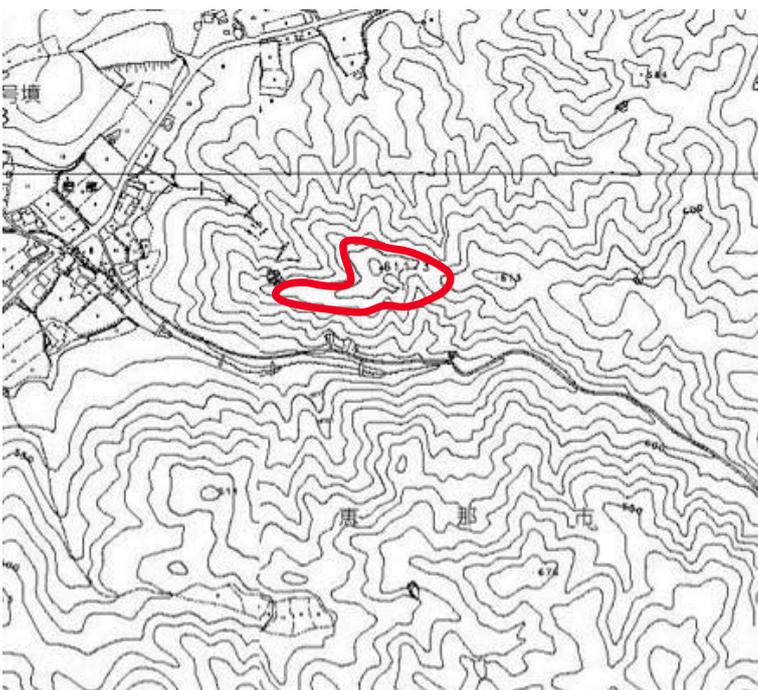
主郭内部 奥に櫓台状の土盛りが見える



主郭西土橋



主郭南の城域内を横断する道



遺跡の位置 1:10,000



赤色立体地図

なめり 奈免入城跡

所在地：岐阜県恵那市山岡町田沢

小 字：奈免入

立 地：峰山から北西に伸びる尾根のうち、奈免入林道が通過する谷の南側尾根の北側斜面にあり、谷に向けて飛び出るような山塊に所在する。

標 高：620m

比 高：90m

現 状：山林

遺 構：郭・堀切・豎堀

残 存：完存

調査日：2022年1月8日

遺構の観察所見

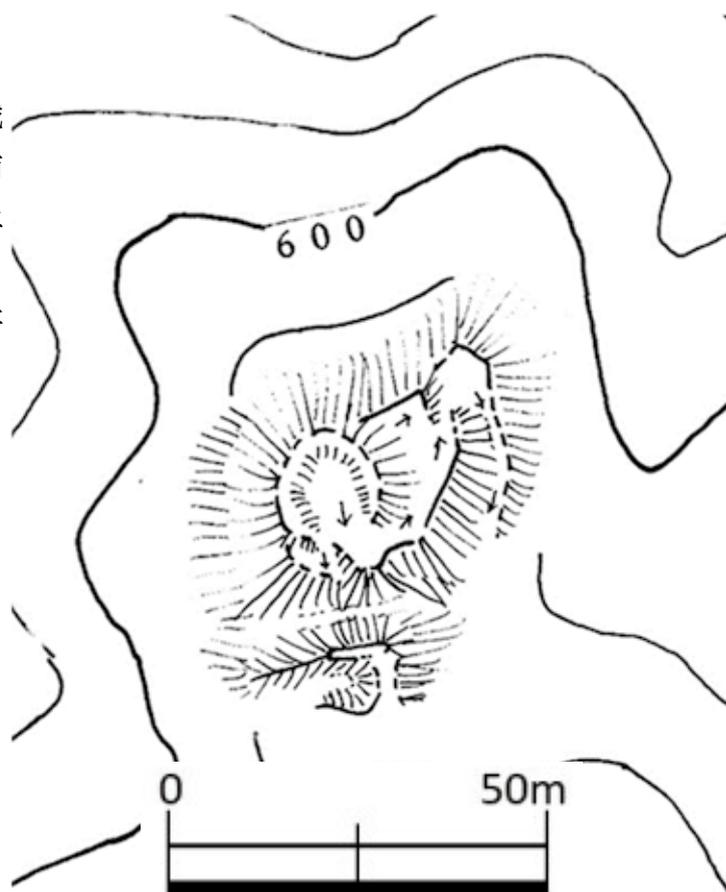
- ・小さな主郭の山城。
- ・奈免入林道を隔てた北側の山には対になるように田沢城跡がある。
- ・主郭は縁辺にそって、土盛りがみられ、主郭が凹地になってる。烽火台をイメージさせるような地形である。主郭より北西への展望が開ける。
- ・主郭北東は尾根が伸び、階段状に二段の郭が配置される。郭内を通路が通過し、東側の谷へと下っている。登城路にあたと推測される。しかしながら現状では、谷に降りる直前で道は不明となる。
- ・北側は尾根が上るが、二本の堀切で遮断する。ただし、外側の堀切の東側には土橋が普請されている。

考察

規模から大名間戦争のような戦争を想定しているとは考えられない。城域の北東から東側にある登城路から、主郭側面を通過し、堀切の土橋を渡って南側の山塊へと続く道が存在する。城の主たる目的はこの道の管理のために設置されたと推測される。

あるいは位置関係から田沢城とセットとなって存在し、烽火台のような連絡の機能を担ったのであろうか。

(齋藤慎一)





主郭の土塁



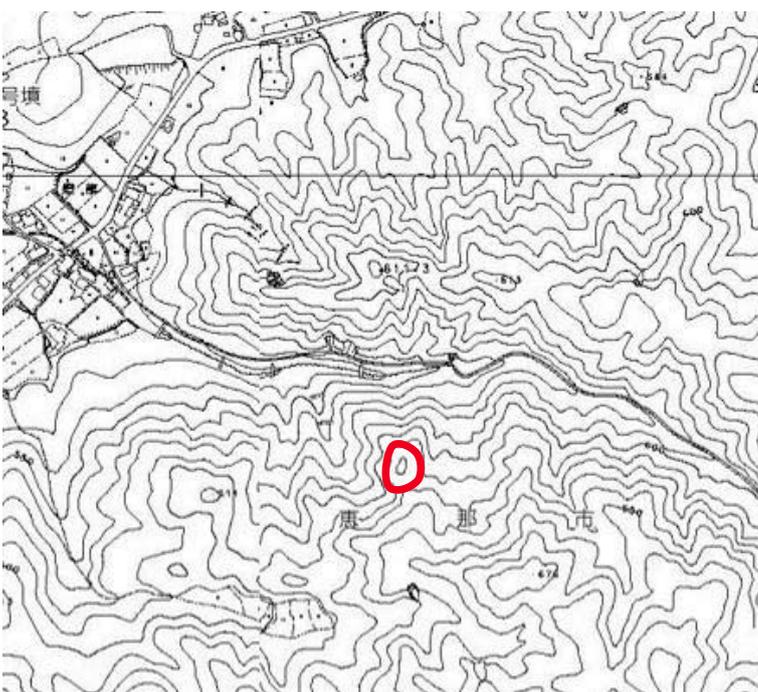
主郭背後の二重堀切



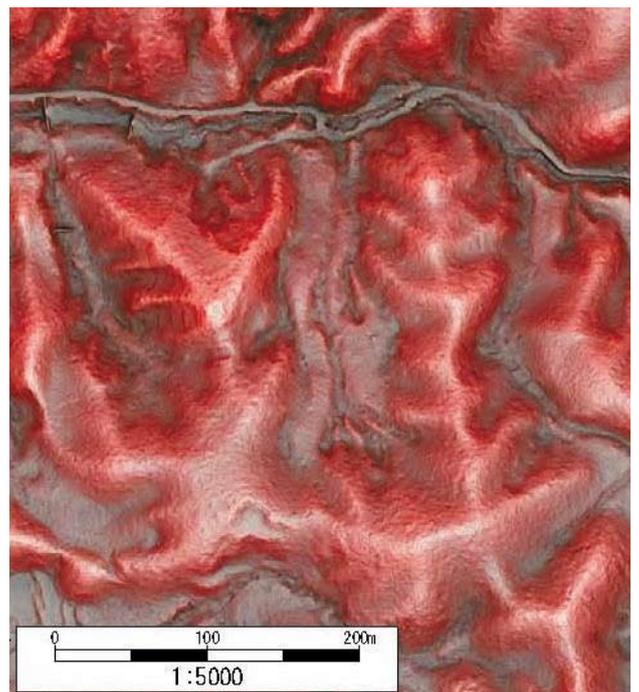
二重堀切と土橋



堀切より主郭



遺跡の位置 1:10,000



赤色立体地図

釜屋大洞城跡

所在地：岐阜県恵那市山岡町釜屋

小 字：大洞

立 地：鶴岡山の北西側斜面に伸びる尾根の一つの頂部に選地する。近世に釜屋、原から鶴岡山を越えて明知に向かう主要な道は、釜屋神明神社前－野志、原札ノ辻－大船、原金毘羅神社前－吉良見の3本があり、他にも尾根ごとに里道が通っていた。城跡の尾根にも釜屋大洞から大船・野志への里道が通る。

標 高：665m

比 高：150m

現 状：山林

遺 構：郭・堀切・竪堀・虎口・礎石

残 存：完存

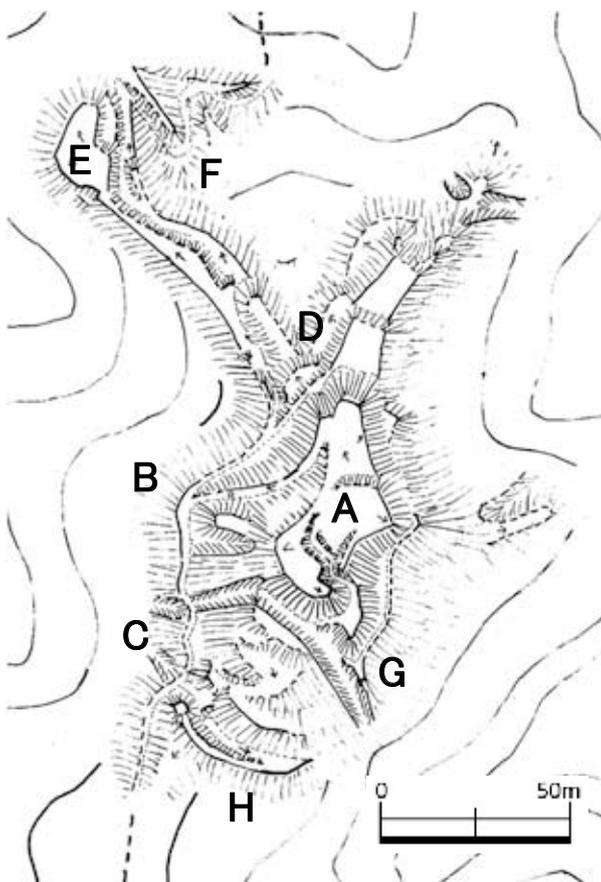
調査日：2022年1月9日

遺構の観察所見

- ・ 標高665mのA地点を主郭とし、北側には階段状に四段の郭を配置する。
- ・ 城域の西側をおおよそ南北方向に道が通過する。道は南北方向へは明知町野志に至るほか、南に上り詰めた最高所で東西方向の山稜を通過する道に接続すると推測される。
- ・ 南北の道が北の釜屋から城域に到達するのがF地点で、Eの出丸などから通行を監視される。
- ・ 城内には南北の道に向けて、遺構からB・C・Dの地点に門を構えていたと考えられる。
- ・ Bの地点は、檜台状に西へと張り出した小郭が門を守る。小郭は南側背後に竪堀を構える。また門の地点には礎石らしき石材が、1点であるが、露出している。
- ・ C地点の虎口は堀切の中に構えられる。道から虎口をくぐると直ぐに左折し、尾根上を主郭に向けて上り、主郭南側の堀切Gを渡り、主郭南東の桁形の門へと至る。なお堀切Gの横断は、現状では堀底に降りるが、あるいは木橋であった可能性がある。
- ・ D地点で城内に入ると、北側に連なる二段の郭に連続する。この郭の北東尾根続きには、二本の堀切と遮断の壁があり、城外と画する。
- ・ 北側の二段の郭からAへの通路は不明であるが、おそらくはA東側の斜面に通路があったと推測される。この道は南側が現存するが、北側は崩壊したのではなかろうか。
- ・ 主郭Aから南側は先述のCへの通路が存在するが、G・Hの二本の堀切が普請される。なお、Hの東側は弓なりの横堀状に長く普請される。

考察

釜屋の集落から登る山の中腹地点に存在し、全体的に山に登る道を抑えることが大きな目的と考えられる。しかし、単なる関所的な機能のみではなく、ある程度の軍勢を想定しての構造



となっており、戦略的な拠点として普請された可能性がある。あるいは地域の領主の拠点と考えることも可能であろうか。

主郭Aにある柵形の門・Bの地点の礎石の門・Gの規模のしっかりした堀切・Hの横堀状の堀切などから、時代は戦国時代後期であることは間違いない。

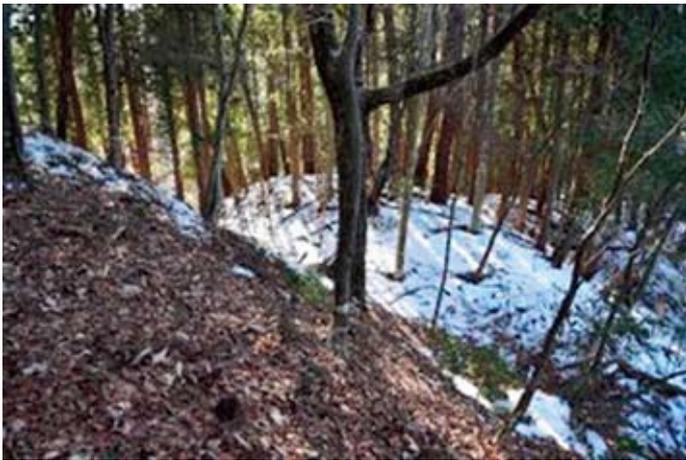
(齋藤慎一)



主郭A



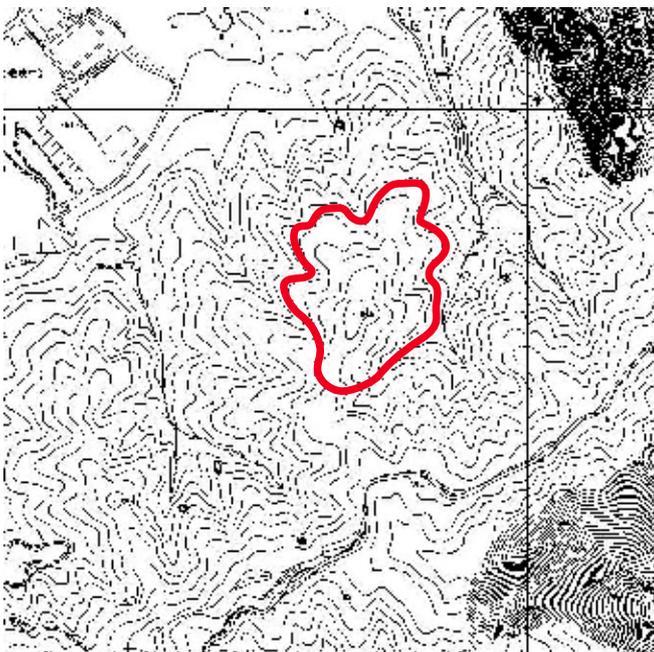
主郭土塁と虎口



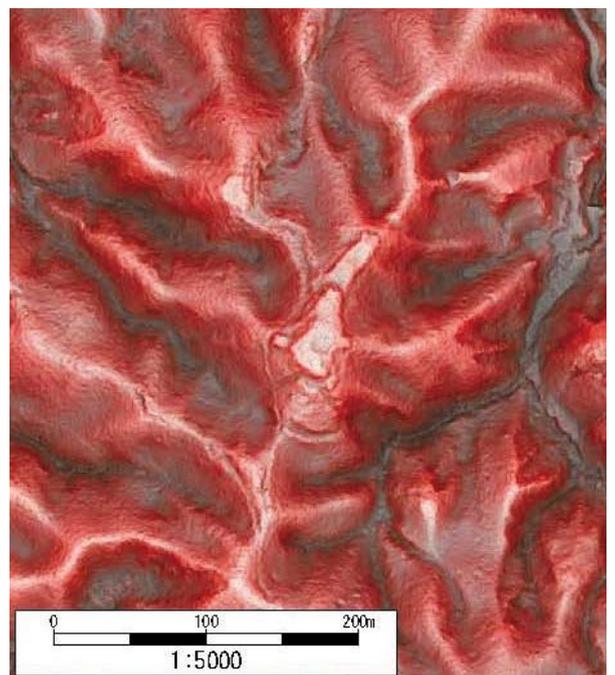
主郭AよりGとCの堀切・豎堀



南の横堀状の堀切



遺跡の位置 1:10,000



赤色立体地図

じんやしき
陣屋敷

所在地：岐阜県恵那市明智町野志

小 字：仲田

立 地：鶴岡山の南東側斜面で野志集落の中央に張り出した尾根の先端に立地する。前項の釜屋神明神社前—野志間の里道はこの尾根の北に出る。また、東を通る国道363号は、明知から山岡町上手向・久保原を経て中山道に通じる街道であった。

標 高：548m

比 高：30m

現 状：山林・墓地

遺 構：郭・堀切・豎堀

残 存：良好

調査日：2022年1月9日

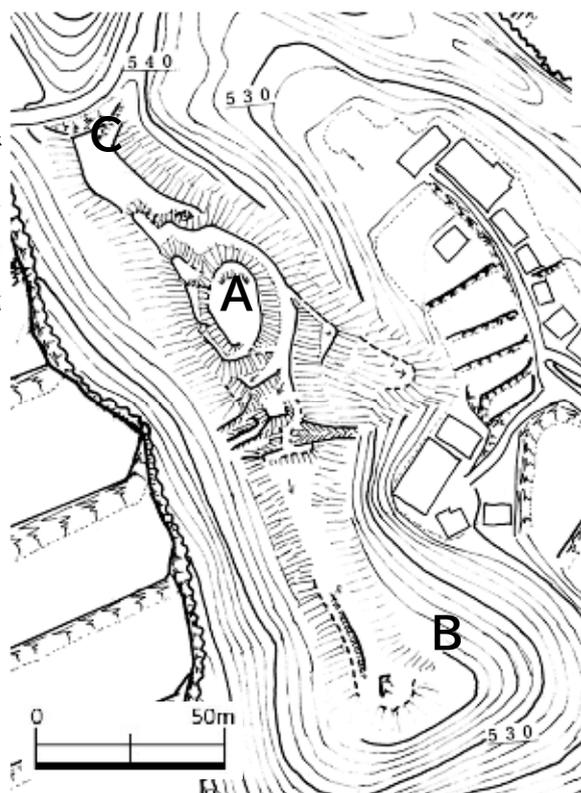
遺構の観察所見

- ・地点Aが主郭にあたる。螺旋状に通路を廻らし、主郭へは南側にスロープ状に入口が設けられる。
- ・全体に切岸がしっかりと普請されている。
- ・主郭南側に堀切が普請され、西側は二連続で豎堀が配置される。正面は南側と意識されていたことを裏付けている。
- ・地点Bは南側に延びる尾根上にある頂であるが、城外と観察され、遺構は見当たらない。
- ・北側の尾根続きのC地点であるが、郭と見做すかが問題であるが、現在の舗装道路の地点に堀切が存在したどうか不明のため、評価が分かれる。
- ・C北側の舗装道路以北は遺構と判断できず、城外であると考えられる。
- ・城域の東北側に平行して細い尾根が延びるが、道が敷設されている。堀切などが認められず、積極的に城域と評価することは控えたい。

考察

単郭の主郭を同心円状に腰郭が取り巻き、南側に堀切等を普請するという簡単な構造の城館である。地名から陣所であった可能性があり、構造からもその点は可能性が考えられる。郭の面積が狭い点もその点に関わる。しかしながら、いかなる機能を有する城館であったか、構造から築城の背景や機能考察することは、今後の検討に委ねたい。

(齋藤慎一)





主郭北側の側面



主郭東側の腰曲輪



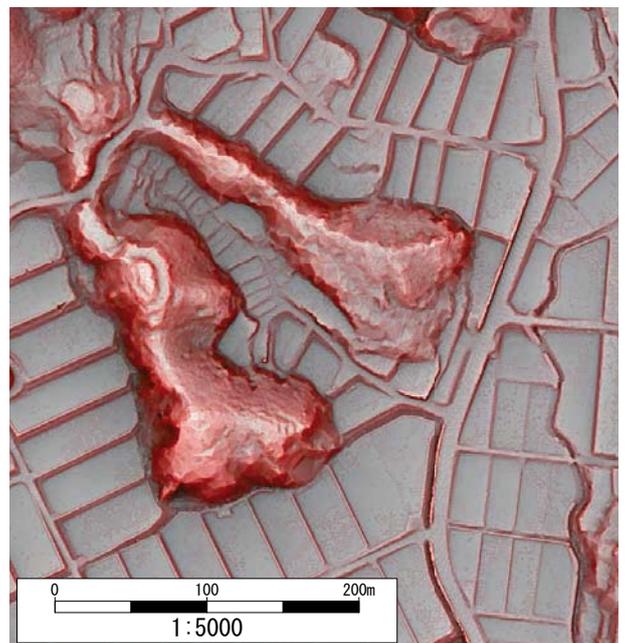
主郭南側の堀切と通路



南面の堀切と切岸



遺跡の位置 1:10,000



赤色立体地図

上矢作大平城跡

所在地：岐阜県恵那市上矢作町大平

小 字：大平

立 地：上村川が形成した達原溪谷の南岸、大平集落の背後の尾根に所在する。この尾根は標高1161mの三国山から北に伸びる尾根の先端にあたる。上村川北岸を通る国道418号は、河岸段丘上に点在する集落を結び長野県平谷村に至る里道を前身とする。

標 高：650m

比 高：100m

現 状：山林

遺 構：郭・土塁・堀切

残 存：完存

調査日：2022年1月8日

遺構の観察所見

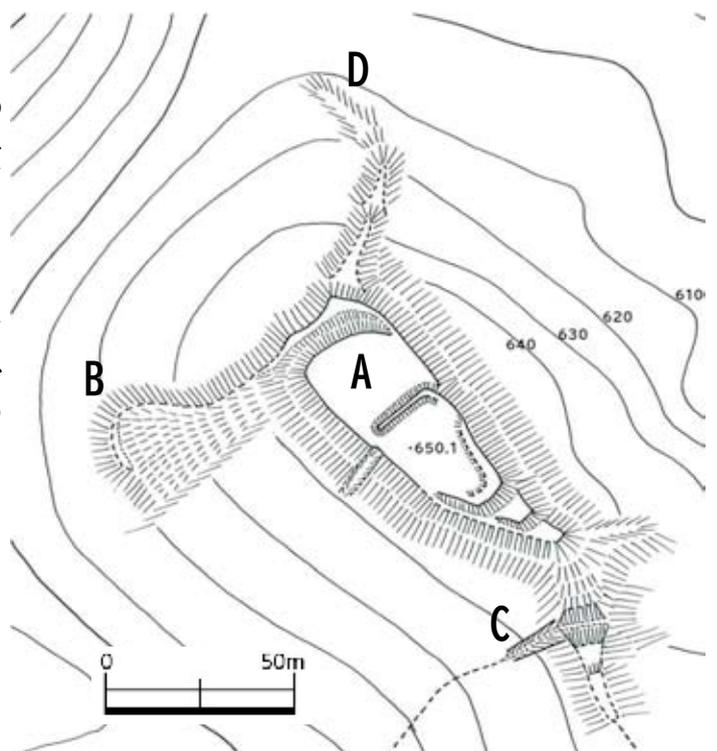
- ・ 標高650mのA地点を主郭とする。主郭の周囲は北西に土塁を設けており、南東部縁辺にも土塁らしき土盛りの痕跡が残る。土塁は主郭三方面を囲っていたことが推測される。
- ・ 主郭北西側は土塁で仕切られた郭があり、その先に腰郭を設けている。こちらからは北方面への展望が開ける。
- ・ 腰郭の先を下ると半月状の平坦地Bが見られる。削平も甘く遺構としての評価は難しい。その先は自然地形が続くが徐々に斜面は急になり、登城路としての通路の有無は不明である。
- ・ 腰郭の北方面Dは麓集落への最短距離となるものの、明瞭な遺構は見られず自然地形となり、先は急斜面で降りることは困難である。
- ・ 主郭南東側には二段の郭を設けている。それぞれの郭に土塁は存在しない。
- ・ 二段の郭の先は自然地形を挟み、Cの部分に縦堀を伴う堀切で遮断している。

考察

基本的な構成としてはほぼ単郭の城館である。城の主たる目的は展望が北側に向くことから大平・達原の集落及び街道の監視と推測される。

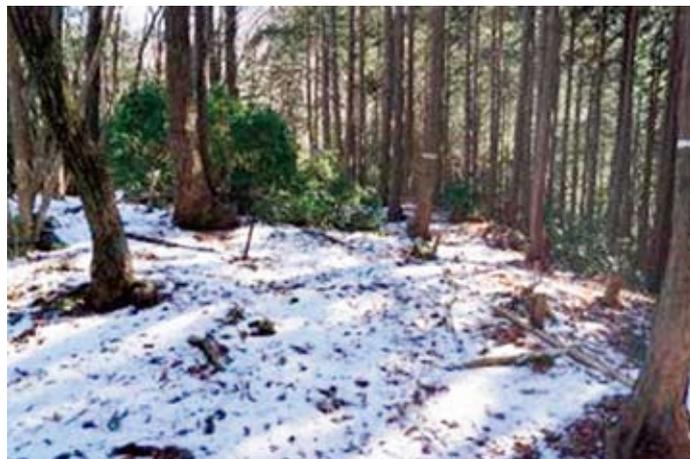
今回の調査ではCの縦堀、堀切から主郭に至った。こちらの道は沢からの直登となり当時の登城路とは考えにくい。一方、B・D方面についても自然地形の先は急斜面となり、明瞭な道の跡は見られなかった。今後の調査に期待したい。

(若林健)





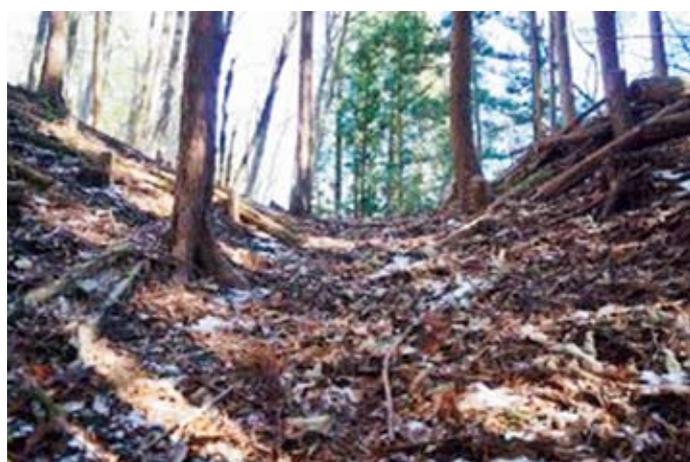
主郭内部 東から奥に土塁が回る



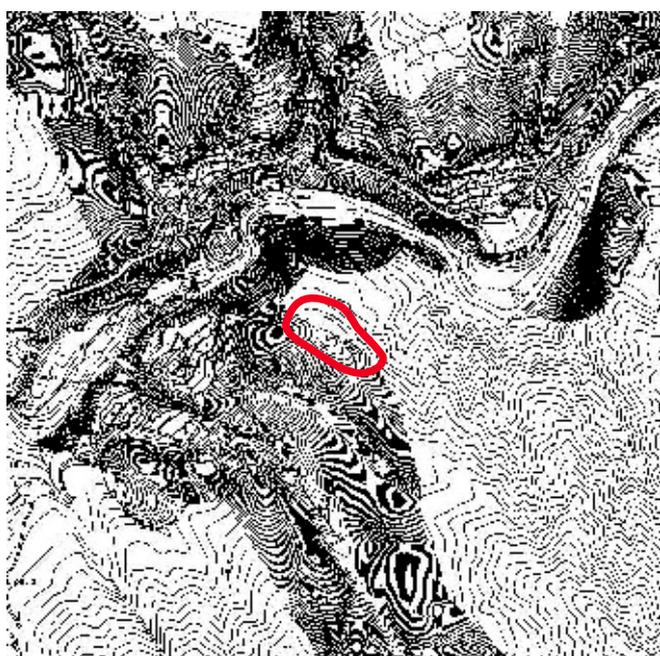
北西より土塁と主郭虎口



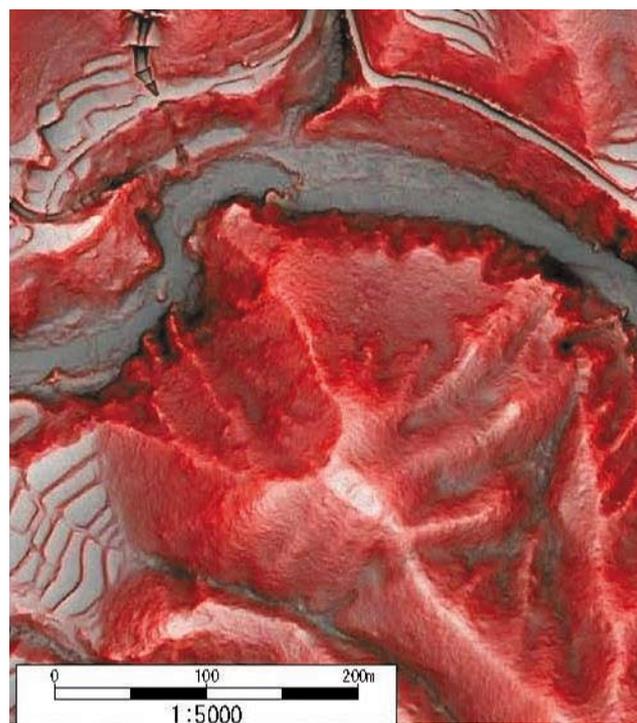
主郭より南東部の郭及び堀切を望む



南東部堀切



遺跡の位置 1:10,000



赤色立体地図

裏山城跡

所在地：岐阜県恵那市上矢作町下

小 字：裏山

立 地：上矢作町下集落の東を北西方向から南東方向へと下る細い尾根上に所在する。下集落を通る国道257号は武節を経て遠江方面へ通じ、秋葉神社(浜松市天竜区)参詣に利用されたことから秋葉街道と呼ばれる。また、上村川対岸の段丘上には下村砦跡がある。

標 高：487m

比 高：150m

現 状：山林

遺 構：郭・土塁・豎堀

残 存：完存

調査日：2022年1月8日

遺構の観察所見

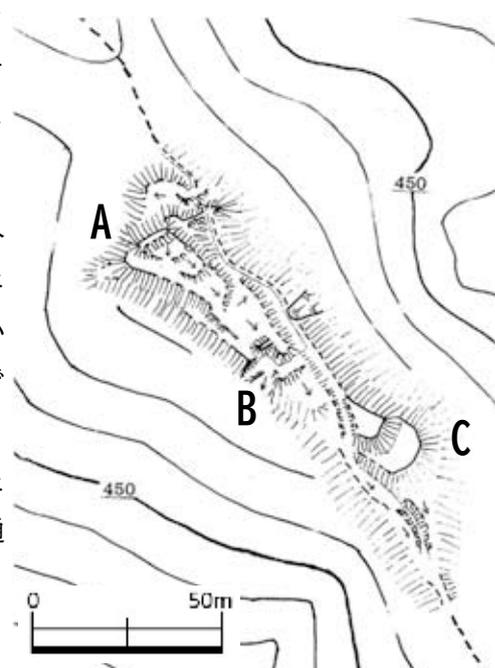
- ・城内Aの地点が最高所で、その地点から尾根上を階段状に4段の郭を配置する。ただし郭の形状は明確ではない。
- ・尾根上を道が通過していたと思われ、遺構の北東側斜面を尾根に添って道が通過する。道は麓の下から上矢作町漆原へと至ったと思われる。
- ・城域の北側はAの地点で、城内の最高所に北側に向けて土塁を構える。道に向けては折と豎堀を普請する(写真参照)。
- ・城内Bの地点には土塁が構えられ、城内中心部の南側を固める。尾根の南側には短いながら豎堀を普請する。
- ・城内Cの地点は2段の郭を南東側に向けて配置し、尾根上を通過する道の城内への入口を抑える役割を担う。

考察

概して簡単な構造の山城であるが、尾根上を通過する道を監視する目的で築かれたことが明瞭に窺える。北側に向けてはAで、南側にむけてはBおよびCのポイントで守ることを考えており、両方向からの通行を抑えていた。

しかしながら、大名間戦争に対応できる構造とは思えず、小規模な人数の通行に対処していたと思われる。道自体は日常的に通行されていたのであろうが、城館の規模は小さいことから、城館が構えられたのは小規模な通行にも関与せざるを得ないような、臨時的な緊張した状況下ではなかったろうか。

築城の政治的な背景は必ずしも明確にならないが、山間部に築かれた小規模城館が山間部の通行に積極的に関与し、築城者(=領主)が交通の把握に努めていたことを示している。



(齋藤慎一)



主郭の内部



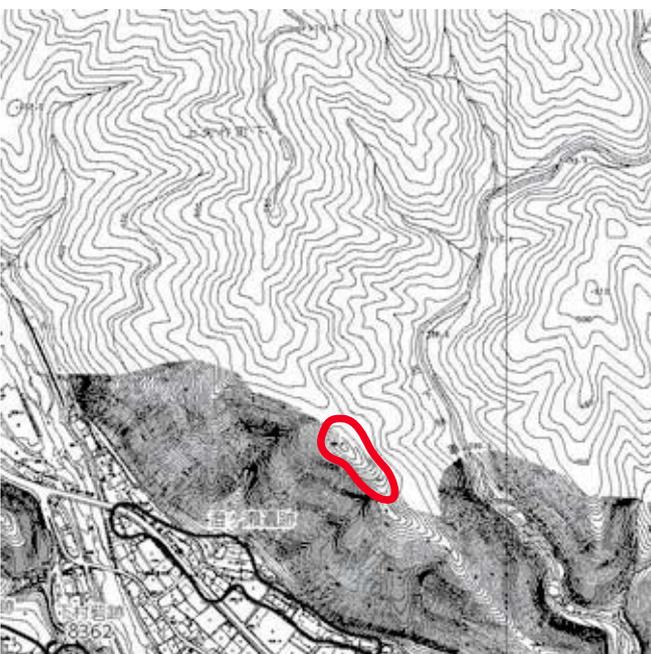
地点Aの土塁 (右側) と豎堀



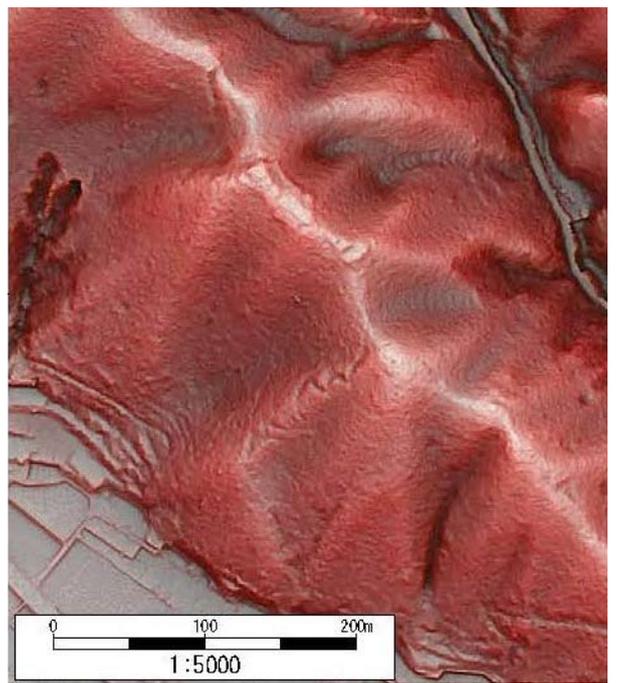
地点Aの土塁と豎堀の頂部



北面



遺跡の位置 1:10,000



赤色立体地図

4. 総括

恵那市の中世城郭調査について

赤色立体地図とはレーザー測量による微地形測量を人間の目に見やすいように赤色で表現したものである。従来の航空写真測量は、山地では樹木の上部しか写すことができず、正確な地上地形とはならない。一方のレーザー測量は地上そのものにレーザーが照射されるため、実際の地上の地形そのものを表現している。

この赤色立体地図は、山を切り盛りして築かれた中世の山城遺跡の構造を把握するために極めて有効である。中世山城調査は地上に残された曲輪、切岸、堀切、土塁などを図化する縄張り図作成が中心であった。作成された縄張り図より時代や築城主体を分析することも可能となった。

この縄張り図作成は城跡の全体像を把握するため、舐めるように山中を踏査しなければならなかった。ところが赤色立体地図は様々な情報を研究者に提供してくれた。第一はどのような遺構が残されているのかを見事に示してくれたことであろう。第二は自然地形と城郭遺構を的確に写し出しており、これまで全山踏査しなければならなかったことが、遺構の存在しない自然地形の箇所には行く必要がなくなったことである。こうした点から縄張り図が迅速かつ正確に描くことができた意義は極めて大きい。

恵那市にはこれまで59ヶ所に城館跡が確認されていたが、岐阜県によって作成された赤色立体地図には城館跡ではないかという地形が何ヶ所かで確認された。

今回それらの城跡想定地を確認するとともに、その縄張り図を作成することとなった。調査を実施したのは飯高城跡、田沢城跡、奈免入城跡、釜屋大洞城跡、裏山城跡、上矢作大平城跡、陣屋敷跡の7ヶ所である。現地での調査は令和4年1月8日から11日にかけて実施した。

飯高城跡、釜屋大洞城跡は堀切、豎堀を組み合わせた構造で、極めて技巧的な縄張りとなっている。詳細は個別城跡の説明に譲るが、両城跡ともに戦国時代後半の縄張りを示していると考えられる。また、その規模も極めて小規模なものである。

上矢作大平城跡、田沢城跡は尾根先端に選地しており、尾根筋を堀切によって切断して城域を設定するシンプルな縄張りとなっている。その規模は極めて小規模なものである。

裏山城跡、奈免入城跡は曲輪造成も甘く、堀切も不明瞭である。城郭遺構であることは間違いないが、臨時性の強い縄張りを示しているものと見られる。その規模は極めて小規模である。

陣屋敷跡は曲輪造成が明確で、その切岸も崩れることなく垂直に近い状態で残されている。やはりその規模は極めて小規模である。背面に堀切の存在することより城跡である可能性は高いものの、あまりに遺構がしっかりしすぎており、近世以降に祠などを建立する際に造成された、または改修された可能性も捨てきれない。

さて、これらの城跡に共通する点がいくつかある。その最大の共通点が伝承すら持たないということである。城跡は江戸時代の地誌にはかなり詳細に記されている。それは村の領主の城跡の伝承が残されているからである。ところが今回赤色立体地図で確認された城跡には村の記憶が残されていないということとなる。

この点に関しては次の共通点となる山麓居館跡が存在しない、または確認できないことも大いに関わってくる。村落に領主の居館が存在しないということは新たに発見された城跡に在地性は希薄で、土豪などの在地領主の詰城とは考えられないことを示している。それが近世の地誌にも記されなかった最大の理由であり、城跡の伝承の有無は伝承の信頼性ではなく、伝承のあるかないかが在地の城であるか否かを示す資料であることを示唆している。

村落との関係の希薄性は今回発見された山城跡は極めて軍事性の高い城跡であったと考えられ、さらにその築城主体も在地勢力ではなく、さらに上級の権力によって築城されたものと考えられる。その築城の契機となったのは近隣の軍事的緊張段階を迎えたことによるものと考えられる。

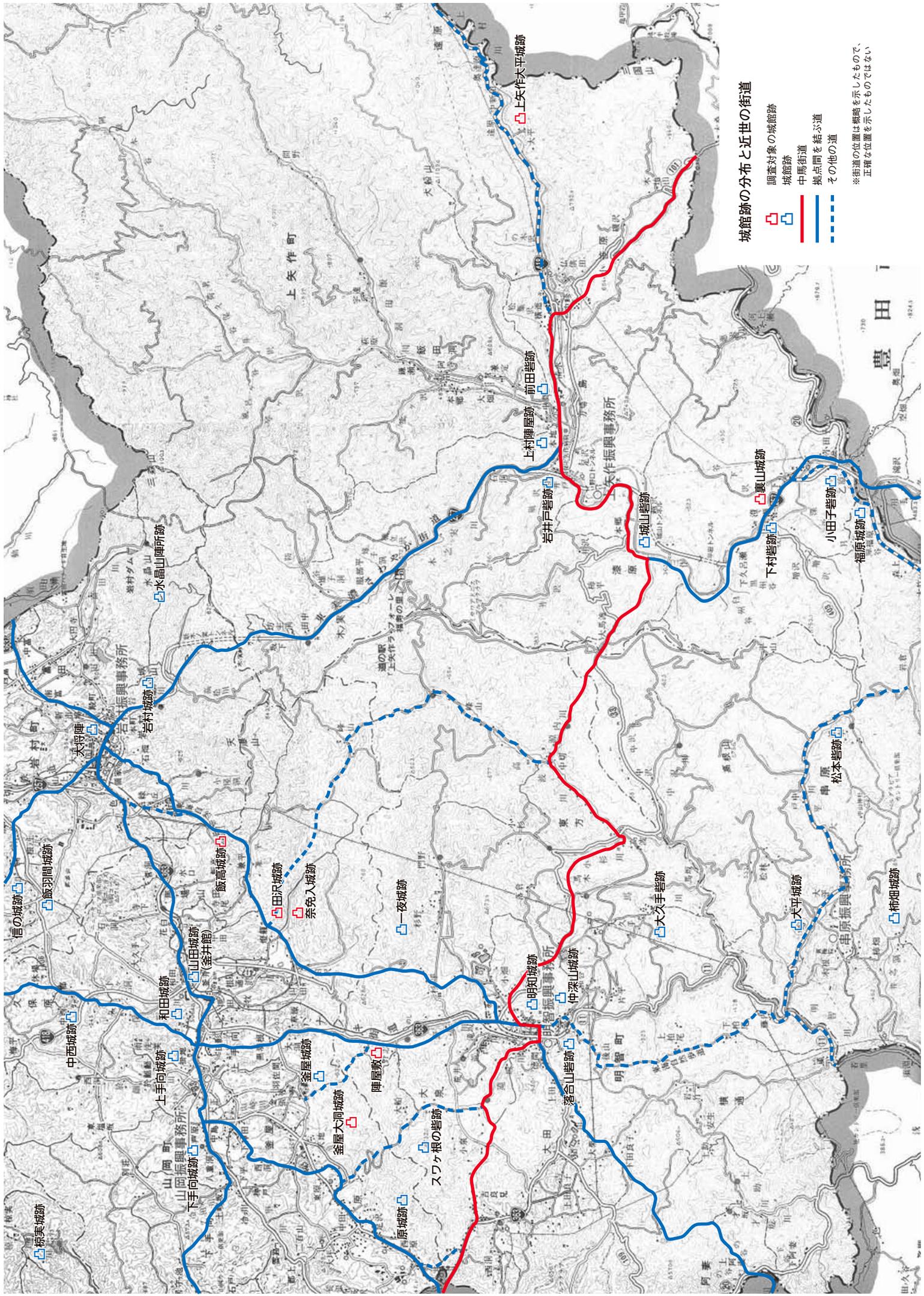
さらに各城跡で共通する点として旧道が確認できることである。いずれもそう山深い位置ではなく、これまで確認できなかったことが不思議なくらいである。各城跡の立地する尾根が旧道の可能性が高く、そうした間道の監視、封鎖を目的とした築城であったと考えられる。

さて、今回確認された城跡、とりわけ技巧的な飯高城跡、釜屋大洞城跡を検討するうえで、岐阜県教育委員会が実施した中世城館跡総合調査で確認されている釜屋城跡、下手向城跡、前田砦跡、城山砦跡の構造は類似しており注目される。これらの城跡は今回新たに発見された城跡とは違い『丹羽氏聞書』に城主の名が記されている。ただ、『丹羽氏聞書』は江戸時代に編纂されたものであり、その内容をそのまま信用することはできない。むしろ発達した城郭構造は『丹羽氏聞書』に記された城主によるものとは考えられない。すでに『岐阜県中世城館跡総合調査報告』で高田徹が指摘するように下手向城跡、前田砦跡、城山砦跡は甲斐武田氏によって改修されたものと考えられる。今回の城跡も甲斐武田氏による築城の可能性も含めて検討する必要があるだろう。

さらに今回調査した城跡以外にも恵那市内には赤色立体地図からいくつかの城跡の可能性の高いところが確認できる。今後はこうした推定地の調査も悉皆的に実施し、築城主体や築城年代を分析することが重要であろう。

今回の調査成果は実際に軍事的緊張段階で築かれた山城が明らかにでき、恵那地域の戦国史を考えるうえで極めて重要な資料が新たに加わったことは大いに評価できよう。

(中井 均)



城館跡の分布と近世の街道

- 調査対象の城館跡
- 城館跡
- 中殿街道
- 拠点間を結ぶ道
- - - その他の道

※街道の位置は概略を示したもので、正確な位置を示したものではありません。